

梅崎春生全集 第三卷

梅崎春生全集

第三卷

新潮社版

梅崎春生全集 第三卷

昭和四十八年十月五日印刷
昭和四十八年十月十日發行

著 者 梅 崎 春 生

発行者 佐 藤 亮 一

印刷所 株式 会 社 金 羊 社

発行所 株式 会 社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(大代表)
振替東京八〇八番

全七卷セット定価 一一九〇〇円



梅崎春生全集 第三卷

編集委員

椎名麟三

野間宏

本多秋五

山本健吉

第三卷『ボロ家の春秋』目次

輪 唱……………九

赤 帶 の 話……………元

黒 い 花……………元

破 片……………叁

莫 邪 の 一 日……………セ

是 好 日……………セ

黒 い 紳 士……………ハ

溶 け る 男……………矣

ヒョウタン……………一〇

指……………一〇

拾う……………一〇

山名の場合……………一三

Sの背中……………一四

春の月……………一六

A君の手紙……………三八

カロ三代……………三五四

服……………三五五

拐帶者……………三六七

春日尾行……………三九二

雀莊……………三〇九

クマゼミとタマゴ……………三三四

大王猫の病氣……………三六六

ボロ家の春秋……………三八

十一郎会事件……………三七

紫陽花……………三七

侵入者……………四三

ある少女……………四三

解題 古林 尚……………四〇

解説 椎名麟三……………四五

輪 唱

いなびかり

おじいさんはだんだんに口を利^きかなくなつた。それは歯が抜けているせいでもあつたが、でもしゃべろうと思えば、まだしゃべることはできた。発音がすこし不明瞭になるだけであつた。

しゃべりたくなると、おじいさんはひとり言をいった。しかしよく聞くと、それはひとり言ではなくて、なにかに話しかけているのであつた。話し相手は、そのときどきによつて、壁であつたり、電熱器であつたり、自分がききんでいる仏像であつたりした。おじいさんは実際に、ひとり言のなかで、話している相手の物品に、さんづけでよびかけたりしたのである。だからおばあさんは、聴き耳をたてるまでもなく、おじいさんが今なにに話しかけているか知ることができた。しかしそんな時でも、おばあさんはすこ

し仏頂づらしたまま、聞えないふりをしていた。おばあさんは、耳はもちろん、眼も歯も、わかい娘のようにたっしゃであつた。

この数年来、おじいさんとおばあさんは、ほとんど口を利き合なかつた。二三年前までは、おじいさんも、寒いから窓をしめなさいとか、このおかずはまずいとか、短い言葉を使うこともあつたけれども、ちかごろではそれも言わなくなつた。おじいさんがものを言わないから、自然とおばあさんも、家のなかでは口を利かなくなつた。しかしおばあさんは、しゃべりたくなると、近所にでかけて行って、よそのおかみさんとおしゃべりをしてきた。

昼のあいだ、おじいさんはモク拾いに出かけた。おじいさんは若いときから、仏師として生活していたが、ちかごろでは注文が絶えてないのであつた。注文がなければたちまち生活にこまるので、払い下げ品の軍隊ゲートルを脚にまいて、おじいさんは毎朝モク拾いに出かけていった。そして一日中、道路や公園や駅をあるき廻つた。おじいさんは駅がいちばん好きであつた。収獲が多いというせいもあったが、また何となく好きなのであつた。夕方になると、手にさげた信玄袋に煙草の吸いさしをいっぱい入れて、くたびれた姿勢になつて戻ってきた。弁当をもつて行かないから、おなかばへここの筈であつた。

おじいさんは歯が弱かつたが、おばあさんは丈夫なの

で、肉が大好きであつた。けれども貧乏なので、安い鯨肉しか買えなかつた。鯨肉でもそのつもりで食えば、牛肉のような味がした。鯨が出盛りになると、おばあさんは毎日それを買つてきた。おばあさんは元氣よく食べたけれども、おじいさんはひどく努力してそれを食べた。別に不平も言わなかつた。おじいさんの食事はながいことかかつたが、おばあさんは先にさつさと済ませて、夜なべの準備にとりかかつた。おばあさんの夜なべというのは、おじいさんが持ち帰つた煙草の吸いさしをほぐして、新しい巻煙草に再生することであつた。

おじいさんは食事がすむと、ひっそりと板の間におりて行つた。ここがおじいさんの仕事場になつていた。そこに坐るとおじいさんの顔は、俄かにがっくりと年とつたように見えた。仕事にかかる前に、おじいさんは彫りかけの仏像をしばらくながめたり、のきをとつて刃先をながいこと光に透したりした。

「今日も、モク拾ひに、行つてきましたよ。ノミさん」
衰えた声でそんなことを呟いたりした。おじいさんの顔には、疲労がみなぎつていて、彫りかけた仏像のつやつやした顔と、いい対照を示していた。

長い吸いさしや短い吸いさし、曲つた吸いさしや口紅のついた吸いさし、おばあさんは丹念に解きほぐして、ごちやごちやにすると、こんどは手巻器械をカチャカチャ言わ

せて、一本一本巻いて行つた。その音のあいだに、おじいさんがのきをあてる音が混つた。のみの音はにぶく間遠であつた。くらい電燈のひかりが、そこにしずかに落ちていた。おばあさんはそちらをちらちら見ながら、指を正確にうごかして、器械をカチャカチャ鳴らした。

（おじいさんは仏師のくせに、うちには仏壇もないんだよ！）

おばあさんはそんなことを考えたりした。そしておじいさんが若いころ女好きで、それで苦労したことなどを思いだしたりした。その頃からこの家には、仏壇がなかつた。しかしいま暗い板の間に坐っているおじいさんの姿は、そのころと別人のようにしなびていた。

十時ごろになると、巻き終えた煙草をひとまとめにして、おばあさんは立ちあがりボタンボタンと乱暴に夜具をしいた。その音にびっくりしたようにおじいさんは顔を上げるのであつた。あたりの木屑を整理すると、自分もたちあがつて夜具をしいた。そしてふたりとも、だまつて別々に寝た。夜中におばあさんが眼をさますと、いつもおじいさんは片頬に、うすら笑いをうかべて眠っていた。

ある日おじいさんは、いつものようにゲートルをまいて、小刻みに脚をうごかしながら、駅の方へあるいて行つた。手には信玄袋をぶらぶらさせていた。切符を買つて歩廊に入ると、すこし前屈みになつて、吸いさしをみつける

と、手をのぼして拾いあげ、大事そうに信玄袋におさめた。それから煙草をくわえている男をみつけると、すこし遠くから、じつと見守っていた。煙草を捨てるのを待っているのであつた。そんなときのおじいさんの顔は、すこしゆるんで、にこにこしているように見えた。男が捨てる時、すぐ近よつてそれを拾いあげ、また他の男の方へあるいて行つた。おじいさんはやせているので、ゲートルを巻いた脚は細い竹の筒みたいだつた。

そのころおばあさんは街角で、昨夜まいた手巻煙草をうりつくし、マーケットから赤黒い鯨肉をひとかたまり買つて戻つてきた。それを台所におくと、おとなりの糊屋のおばあさんのところへおしゃべりに行つた。

しばらくすると台所にやせたぶち猫がおずおずと入つてきた。あたりを見廻して台所にあがり、流しのざるに伏せた鯨肉を、歯ですこしずつ千切つて、にちゃにちゃと食べた。齒に肉がひっかかるらしく、ときどき前脚をあげて踊るような恰好をした。そのたびに流し板がかたかたと鳴つた。鯨肉はすこしずつ食いちぎられ、不規則な形に齒跡がのこされて行つた。猫の腹はしだいにぼつたりふくらんできた。すると表の方から窺音が近づいてきたので、猫はぎょつとしたように首をあげた。……

「あのじい。おれが煙草すてるのを待ってやがる」
派手なアロハシャツを着た青年が、駅の歩廊で、連れの

男にそう言った。そしていまいましうに吸いかけの煙草を、おじいさんの方へピンと弾きとばした。煙草はあかい線となつておじいさんの足もとにとんだ。

そのとたんに、おじいさんは二尺ばかり飛びあがつた。煙草の火がゲートルのほぐれたところにもぐりこんで、ぶかぶかの地下足袋のなかにおちこんだのである。おじいさんは真赤な顔になつて、やつ、ほう、と変な叫びをたてて、片足をびよんびよんさせた。

夕方になつておじいさんはとぼとぼと家に戻つてきた。暗い空からは、今にも雨が落ちてきそうであつた。おじいさんはかすかにびつこを引いていて、はなはだしく疲労しているように見えた。

台所には鯨肉を煮る匂いがしていた。かまどの前では、おばあさんが仏頂づらをして、しきりに火吹竹をふいていた。

やがて夕食が終えたころ、屋根の上で雨のおとがぼつりぼつりと鳴つた。そしてそれはだんだんひどくなつた。

部屋のみみではおばあさんが信玄袋をひらいたら、吸いがらはいつもの半分ぐらいしかなかった。おばあさんはとがめるような眼付になつて、おじいさんの方を見た。おじいさんは大きな耳をひくひくと動かして、奥歯でしきりに鯨肉を噛んでいた。おばあさんはかなしいような、あきらめたような表情になつて、吸いがらをざらざらと畳にこぼ

した。

(ほんものの牛肉を、いっぺん腹いっぱい食べたいな)

おばあさんは気をまぎらすように、そんなことをかかんがえた。へんな猫に鯨肉を半分も食われたことを、まだおばあさんは腹を立てているのであった。しかし火吹竹で猫の横面を力いっぱいなぐりつけたとき、猫がよろめきながら、燃えるようなかなしい眼付をしたことを思いだすと、やはりおばあさんの胸にも物悲しい気持がひろがってきた。

茶碗をかたづけると、おじいさんはひっそりと板の間におりて行った。そしていつものところに坐った。内側にまげた足先に、あかく火ぶくれができているのが、暗い電燈の光でもはっきり見えた。おじいさんは顔をあげ、雨の音をききながら、ぼんやり壁にかかった雨合羽をながめていた。明日も雨だとすると、吸いがらは濡れてしまうから、出かける必要はないわけであった。おじいさんは奥歯をなおもすり合せて、はさまった鯨肉の一片をかんだ。今日のも、やはり堅い肉であった。しかし今夜ほど、噛むのに骨の折れたことは、今までにあまりなかった。噛んでいるだけで、体力が尽きてしまいそうな気がした。

「雨合羽さん。雨合羽さん」おじいさんは口の中でもぐもぐと呼びかけた。「この四五年来、わたしは鯨を一匹はたべましたよ」

吸いがらをほぐす手をやめて、おばあさんはきらっと眼

をひからせた。おじいさんは、のみをとりあげながら、うつむいたまま、ぼんやりわらっているのであった。不気味なかげが、おじいさんの額におちていた。その前には、半分ほど出来かけた仏像が、背をそらして立っていた。この仏像に、おじいさんは二箇月もかかっているものであった。

窓のそとを、ときどき青白く稲妻がはしった。おじいさんの背後には、でき上った小さな仏像が、壁を背にしているくつもならんでいた。鬚ひげをふかめて鎮もっている仏像たちが、稲妻の青い光にとつぜん浮び上った。仏像たちは微妙な光を全身にたたえていて、まるで生きて歩きだしそうに見えた。しかし稲妻がきえると、それらはまた壁の暗がりにしずんで行った。

猫の話

大通りに面した運送屋の二階をかりて、若者と一匹の猫が住んでいた。

この猫は、ある日とつぜん、彼の部屋にやってきた。どこからともなく、板いた箱をつたって、彼の部屋に入ってきたのであった。そのまま猫は彼の部屋に居ついた。彼も孤独であったから、なんとなくこの猫に愛着をかんじるようになった。

猫の皮は茶色のぶちで、耳たぶがうすく鋭くたつてい

た。身体のあちこちが、しなやかにくぼんでいて、尻尾はながく垂れていた。

それまでひどい生活をしていたと見えて、猫はすっかりやせていた。眼だけが大きく澄んでひかっていた。彼は外食券食堂にゆくたびに、食べのこした魚の骨やパンの耳を、紙につつんで持ってかえった。猫はそれを待ちかねて食べた。そのほかに自分で、部屋にやってくるカナブンブンや蠅をとらえて食べた。猫がいちばん好きだったのは、蟋蟀であつた。運送屋のとなりが空地であつたので、そこから蟋蟀が何匹も入ってくるのであつた。

蟋蟀が部屋に入ってくると、猫は急にしんけんな眼付になつて、畳の上にひらくたくなり、蟋蟀の姿をねらつた。その姿勢はなにか力にみちていて、眺めていると、自分が蟋蟀をねらっているような錯覚に彼はおちた。猫がぱつと飛びあがると、かならずその蟋蟀は猫の口にくわえられていた。猫はそれからばりばりと蟋蟀を噛み、触角だけをこして、他はみな食べてしまうのであつた。

彼の部屋には、だからあちこちに、細い剣のような触角がたたみの上にちらばっていた。それが足の裏にざらざらふれるたびに、彼は次のような句を思い出した。

蟋蟀在堂 歳聿其莫

それはむかし、伯父さんから習った文句であつた。意味はわからなかったけれども、彼は何とはなく、これを記憶していた。その他伯父さんから、いろいろなことを習つたが、覚えてゐるのはこれだけであつた。あとのことは、すべて忘れていた。

夜になると、猫は彼に身体をすりよせて寝た。そのしなやかな皮のしたに、彼はかほそい猫の骨格をかんじた。もつといろんなものを食わせて、肥らしてやりたいと思つたが、貧乏でそれも出来ないものであつた。食堂から魚の骨をつつんでかえるのが精いっぱいであつた。

昼間、ときどき猫はどこかへ出かけて行つた。しばらくしてかえってくると、おなかがふくらんでいて、ぐったり横になり、舌で顎のへんを舐め廻したりした。どこかに行って、なにか食べて来るにちがひなかつた。そんな時は蟋蟀がそばまできても、あまり見向きもしなかつた。

「なにを食べてきたんだい。おまえは」

彼はよく指先で、やわらかい脇腹をぐりぐりとつついてやつたりした。いまだきよその猫に食物をあたえる家もないだらうから、どこかの台所でぬすんで食っているにちがひないと思つたが、彼にはそれを叱るすべもないのであつた。

「ぬすむのもいいけれど、見つからないようにしろよ」

彼はこの猫に、カロという名をつけてやつた。意味もな

い名前であった。それから三箇月ほどすぎた。

ある曇った日、彼が窓から大通りを見おろしていると、向う側の横町から、カロが出てきた。なにかへんにふらふらした歩きかたで、いつものような確かさがなかった。頸をしきりに曲げるようにしながら、ひよろひよろとよるめいて、大通りを横切ろうとした。切迫した予感が背をはしって、彼は窓べりをにぎりしめたまま、身体を思わずのり出した。そのとたん、右手の方から走ってきた黒い自動車、あつという間に視野に入ると、茶色のカロの姿は、ひよろひよろとその車輪のしたに吸いこまれた。

頭のなかが燃え上るような気持で、彼はそれを瞬間に見た。カロの身体がぐしゃっとつぶれる音を、彼はその時全身でありありと感じとった。自動車はちよっと速力をゆるめたが、すぐにスピードを増して左手の方へ小さくなって行った。暗い空のした、ひろい車道のまんなかに、カロのつぶれた死骸だけがぼろ布のようにこがっていた。それを一目見たとき、彼は大声でわめき出したい衝動をこらえながら、眼を大きく見開いて、指をがくがくと慄えさせていた。

その夜、彼は蒲団にもぐって、長いこと泣いた。カロをこんなに愛していたとは、いままで意識しないことであった。こみあげてくる涙のなかに、生きているカロのいろんな姿体がかんできて、彼はなおのこと泣いた。外では雨

が降ってきたらしく、板廂をはじく水音が聞え、遠く近くで雷の音がごろごろと鳴った。前的大通りを、自動車が水をはねて疾走してゆく音が、ときどき聞えた。

翌朝になると、雨はあがっていた。彼は寢巻のまま、はれぼったい臉の下から、乾いた眼で大通りを見おろした。濡れてだだびろい車道のまんなかに、カロの死骸があった。やはり夢ではなかった。それは昨夜なんども自動車のタイヤにひかれたと見えて、板のようにうすっぺらになって、舗道にひらたく貼りついていった。猫の身体のかたちのまま、面積は生きているときの五倍にもひろがっていた。彼は急に無惨な気がして、また涙がながれ出そうな気がした。そしてあわてて、窓からはなれた。

大通りを、一日中何十台何百台ともしれぬ自動車が往來した。彼は一日中部屋にいて、その音をきいていた。

翌日は日が照って、道が乾いた。道が乾くのといっしょに、カロの死骸も乾いた。乾いてみると、それは猫の死骸という感じではなくて、猫の形をしたよれた厚紙のような感じであった。そしてそれは舗道に貼りついてはいたが、四囲の部分が疾走するタイヤの圧力ですこしめくられ、ひらひらと動いていた。その上を容赦なく、いろんな型の自動車やトラックが通った。彼はそれを窓から見おろしていた。

彼はその日一日中、カロのことをぼんやり考えていた。